

東日本大震災、福島第1原子力発電所事故で既存の価値観が大きく揺れ動く中、宗教とりわけ神道はどんな役割を果たせるのかを考えたのが本書。「神道ソングライター」を名乗り、歌でも神道の魅力を伝えてきた宗教学者が書いてだけに、親しみやすい内容になっている。

まず神道における死生観を童謡「むすんでひらいて」で説明する手法がユニークだ。「おひらきにする」という言葉があるように、「ひらき」は「開放」以外に「解散」「消滅」という意味を持つ。だから「なくなる」＝「死」は「もう一つの世界へ開いていく」ことでもあるという。

神道の核心として「存在への畏怖・畏敬」を挙げる。そ

## 宗教の役割を親しみやすく説く

れが祈りにつながるわけだが、被災地を訪れたときに「素朴に素直に祈りを捧げること」ができない自分」に気づく。被災者にどう届くのか、分からなかったからだ。

神道には、「霊」には穏やかな恵みをもたらす和魂にぎはたまと破壊的な現象をもたらす荒魂あらいたまがあるとの考え方があって、「そのような説明原理を今回の事態に当てはめること自体を拒絶する異和感があった」。

迷いのはてに著者は原点に戻る。「役えんの行者」ならぬ「縁の行者」となり、「地縁・血縁・知縁・霊縁」という4つの縁の再構築を目指すと言っている。神道をはじめ宗教にとってやはり大切なのは人と人を「むすぶ」ことなのだろう。